

ATEM Newsletter



2013 全国大会特集号

October, 2013

発行 映画英語教育学会
住所 〒169-0075
東京都新宿区高田馬場
4-3-12アルク高田馬場4F
TEL 03-3365-0182
FAX 03-3360-6364
E-mail office@atem.org
郵便振替 00820-3-1477

映画英語教育学会 / The Association for Teaching English Through Movies

■新会長挨拶

Let's grow out of our mold and jump ahead!

Makoto Kurata

Kyoto University of Foreign Studies

倉田 誠 (京都外国語大学)



Ladies and Gentlemen,

It is with a great deal of pleasure and honor that I accepted the opportunity of working with you as the fifth president of ATEM. I would like to have the new ATEM be ready to jump ahead by clarifying what I intend to do and how I intend to strengthen our academic association during my tenure.

First of all, I would like you to understand that you all are great assets for ATEM and that you and I should help each other to further improve the quality of both the regional and national-level of activities of our organization. Only by developing academically appealing conferences and publications, can we lead many people to realize the benefits of using movies for pedagogical purposes, and we will be thus able to welcome to our academic association more teachers who are interested in effectively using movies in their classroom settings.

We might also consider ascending to a point where we become more aware of the necessity of enlarging our academic and pedagogical perimeter, so that we can pull in more people not simply from the field of

English education, but also from fields of linguistics, literature, area studies, communication studies, and so forth. In order to attract many teachers and researchers from outside and widen our scholastic arena, we might step forward to make interesting movie-based presentations both at ATEM and non-ATEM conferences. We might start to enlighten people outside our organization by demonstrating how useful and versatile movies and other media-oriented materials can be as teaching tools. By so doing, we will enable ourselves to grow out of our traditional mold, increase our enrollment considerably, and develop into a multi-stratified academic organization whose activities will be superior in quality and in quantity to those of other movie-based English education societies.

I would like to encourage you to carry on conducting a variety of research as well as creating fine teaching materials with your ATEM colleagues. In addition, collaborating with the wonderful Korean scholars of STEM (The Society for Teaching English through Media) would be another exhilarating avenue for us to explore. There are so many innovative initiatives we can take simply by making use of our grand human resources. Ladies and gentlemen, why not grow out of our mold, and jump ahead? Let's put our love for movies into action!

May I conclude my greetings by reminding you that I am counting on all of you to develop ATEM into an even more thought-provoking academic organization? Thank you for your kind attention.

映画英語教育学会(A T E M)第 1 9 回全国大会

大会テーマ：映画英語が創る新しい授業展開

Conference theme : A New Development in Teaching English through Movies

日時：2013年8月6日(火) 午前9:00～午後5:25

会場：相模女子大学(神奈川県相模原市)

■特別講演

映画テキストにおける文法：最良のテキストとしての映画スクリプト

(Grammar in the Film-Text: The movie transcript as the teaching resources)

田中茂範 先生(慶応義塾大学教授)

本年度の特別講演は講師に慶応義塾大学の田中茂範教授をお招きした。田中先生はコロンビア大学大学院博士課程修了、専門は応用言語学。NHK教育テレビで『新感覚☆キーワードで英会話』(2006年)、『新感覚☆わかる使える英文法』(2007年)の講師を務められていたので、ご存知の方も多だろう。



以下が講演の主な論点である。

- ① デンマーク人言語学者 Otto Jespersen が述べているように、言語は文法規則によって組み立てられた「自由表現」と、そうでない「定型表現」からなる。
- ② 発話はチャンク(直感的には一息で話せる長さの表現)を組み合わせること(=チャンキング)によって成り立つ。
- ③ 映画の会話は、教材として理想的なテキストである。
- ④ 映画を使った文法指導の鍵は、学習者にとって意味のあるエクササイズを編成することである。

田中教授は、“The Blind Side”(2009)、“The Outsiders”(1983)などの映画から具体的事例を取り上げながら分かりやすく説明された。会場一杯の聴衆は学術レベルの高い1時間10分の講演に聞き入り、質疑応答は10分では短い印象であった。(渡邊 信)

■STEM特別発表

Creating Learner-centered Classrooms Using Movies

Dr. Ryu, Do-Hyung (Kookmin University)

今大会ではSTEM(The Society for Teaching English Through Media)を代表し、国民大学のRyu, Do-Hyung先生に発表いただいた。下記が発表要旨である。

映画が英語教育にとって、非常に効果的なツールになり得ることは、多くが認めるところである。しかしながら、授業内の学習活動において、学習者は映画を視聴している間は集中するが、その後で教師が文法や表現の説明をし始めた途端に興味を失ってしまうという光景はよく見受けられるところである。このような状況を打開するために、本発表では、フロー理論に基づく言語活動の導入が提案された。フロー(Flow)とは、ハンガリー出身の心理学者チクセントミハイ(1990)が提唱した概念で、人間がある活動に没頭している際の、活性化された精神状態を指し、以下のような特徴があるとされている。1. 明確な目的がある、2. 専念・集中している、3. 自意識・自己感覚が低下している、4. 時間感覚がゆがむ、5. 直接的・即座に反応する、6. 能力と難易度のバランスがとれている、7. 状況や活動を自分で制御できている、8. 活動自体に本質的な価値があり、苦にならない。



Csikszentmihalyi, M. (1990). *Flow: The psychology of optimal experience*. New York: Harper and Row. (ISBN 0060920432) (井村 誠)

=2014 全国大会のお知らせ=

**ATEM 20th Commemorative
National Convention**

映画英語教育学会(ATEM)第20回記念大会

Date: August 20 (Wed.), 2014

**Place: Fukuoka Jo Gakuin University
(福岡女学院大学)**

Hosted by the Kyushu Chapter

■総会

まず始めに、角山照彦会長から任期満了の挨拶があった。次に、総会に出席した多くの会員に見守られながら、新しい会長が紹介された。そして新会長の倉田誠先生がATEMのこれからの方向性を説明した（詳細は1頁の新会長挨拶参照）。続いて、新しく任命された専務理事、支部代表理事が紹介され、全員が承認された。メンバーは以下の通りである。

専務理事：

事務局長 真下富雄（榊広真アド）
 国際交流担当 井村 誠（大阪工業大学）
 紀要編集担当 塚越博史（北海道医療大学）副会長兼務
 ICT担当 新田晴彦（専修大学）
 大会担当 藤枝善之（京都外国語大学・短期大学）
 広報担当 松田愛子（翻訳者）



倉田新会長と専務理事（新田、井村、松田、藤枝、塚越）

支部代表理事：

北海道支部 秋山敏晴（北海道工業大学）
 東日本支部 吉田雅之（早稲田大学）
 中部支部 諸江哲男（愛知産業大学）
 西日本支部 藤枝善之（京都外国語大学・短期大学）
 九州支部 砂川典子（九州ルーテル学院大学）



倉田新会長と支部代表理事（砂川、諸江、吉田、秋山、藤枝）

承認された各理事の就任挨拶の後は、会計報告・予算案の説明があり、ともに承認された。最後に、今年度の紀要に掲載された論文の中から優秀論文が発表された。受賞論文は『パブリックドメイン映画を活用したeラーニング教材の開発—eラーニングによる支援は「単位の実質化」につながるのか—』である。表彰式では受賞論文の執筆者である前会長の角山照彦先生に優秀論文賞が授与された。（塚越博史）

優秀論文賞

受賞のことば

広島国際大学 角山照彦

この度優秀論文賞を賜りましたこと、大きな喜びと共に、身に余る光栄と感じております。映画英語教育の実践を始めてからすでに20年が過ぎましたが、映画の活用にまだまだ大きな可能性を感じるものの、同時に多くの課題も感じています。特に、動機づけに留まらない教育効果の実証の積み重ねと教材の充実は映画英語教育の普及に欠かせないものであると考え、これまで研究を進めてまいりました。中間報告として発表した拙作を評価して頂いたことは、誠に感謝に堪えません。

著作権法上の制約のある映画の教材化には労力が必要ですが、教材のモジュール化と共有化をキーワードに今後とも多くの学習者、教員にとって役立つ教材の開発を進めていきたいと考えています。



私のこれまでの研究は本学会の歩みと共に進んできたように感じます。また、本学会の研究発表から学んだ点も数知れません。本学会がこれからも多くの研究者にとって互いに切磋琢磨する場であり続けることを祈念しています。

今回の受賞を励みとして、また、これを新たな出発点として初心に戻り、残された多くの課題に今後も真摯に取り組んでまいりたい所存です。この度は本当にありがとうございました。

■ワークショップ（東日本支部企画）

映画『ハリー・ポッター』で英語の授業：小学・中学・高校・大学向け“授業デモンストレーション”

Demonstration Lessons:

Teaching English with the Movie “Harry Potter and the Philosopher’s Stone” (2001)

東日本支部企画による「ワークショップ『ハリー・ポッター』で英語の授業：小学・中学・高校・大学向け“授業デモンストレーション”（Demonstration Lessons: Teaching English with the Movie “Harry Potter and the Philosopher’s Stone” (2001)）」では、小学校部門から鈴木智子先生（相模女子大学小学部）、中学・高校部門から嘉来純一先生（早稲田大学本庄高等学院）、大学部門から吉田雅之先生（早稲田大学）の3名が、映画『ハリー・ポッターと賢者の石』（2001）の映画を使い、それぞれの教育課程に合った授業デザイン・展開を英語で実演した。

鈴木先生は、“七色”の語の発音を、人気映画の映像とフラッシュカードを利用して練習することで、小学校の時期が最も適齢とされている英語音の修得が、楽



しく無理なくできることを提案した。嘉来先生は、“グルグル・メソッド”（静哲人）教授法と映画英語を融合することで、英語ネイティブ・スピーカーに近い発音や

語句・文の運用力が無理なく育成され、さらに生徒の仲間意識の向上にもつながることを提案した。吉田先生は、映画の場面を利用することで、大学生がこれまで教科書で学んだ英

文法を、映像の中で疑似体験的に理解し、さらなる理解の深化と運用力の育成にも効果が発揮されることを、冠詞の例で示し提案した。鈴木先生、嘉来先生、吉田先生の発表は、それぞれ13分と短い時間であったが、1つの映画が、3つの異なった教育課程の授業に使えるという映画英語の多様性と応用力を示し、今日求められてい



る実践英語力の育成に効果を持つことを聴衆に強く印象付け、さらなる映画英語教育の普及と拡大に大いに貢献するものであった。（大月敦子）

（写真順：鈴木、嘉来、吉田先生）

■開会式・閉会式・懇親会

会長の角山照彦先生、姉妹学会 STEM の会長の Lee



Donghan 先生、会場の相模女子大学の名誉教授であり、理事である



大塚光子先生の挨拶で開会された第19回全国大会は、運営担当の東日本支部



（左上：角山先生、右上：Lee 先生、左：大塚先生、下：倉田先生[左]と井村先生[右]）

企画に始まり、STEM 特別発表、各研究発表、総会、シンポジウム、特別講演と進行し、大会実行委員長の吉田雅之先生の挨拶で無事閉会した。

懇親会は、国際交流専務理事の井村誠先生の司会のもと、大会開催を支えた相模女子大学の



大月敦子先生（大会運営委員）の挨拶と倉田誠新会長の乾杯の音頭でにぎやかに幕を開け、STEM の参加者と発表者、事務局や大会運営スタッフ、その他関係者らが料理に舌鼓を打ちながら楽しく語り合う、充実した時間を過ごした。（編集部）



懇親会での記念撮影（撮影：横山仁視）

■シンポジウム

【九州支部】

Motivational Resources in English Lesson

九州支部のシンポジウムは、“Motivational Resources in English Lesson”というテーマで、4つの発表が行われた。最初の発表は、大木正明先生（大分工業高等専門学校）による、Using Music and Visual Aids in an English Classroomで、英語の授業に音楽を取り入れ、学生たちの動機付けを促す方法と、教材の選択方法、および授業運営についての解説だった。2番目は、砂川典子先生（九州ルーテル学院大学）の Using Courtroom Drama in an English Classroom。英語の授業、特にディスカッション／ディベートの授業に法廷ドラマを取り入れる際の方法やそのメリットを、アメリカのTVドラマ



（大木先生、砂川先生）

ドラマ“Ally McBeal”を用いた授業モデルやパターンを紹介しながら解説した。3番目は、八尋春海先生（西南女学院大学）の

Students Sympathy with the Character in Jack Frost: A Key to Motivation in English Studyという発表で、英語学習の動機づけの1つの可能性として映画“Jack Frost”を取り上げた。この映画に登場する2人の少年はともに父親を亡くすというトラウマを抱えている。どこの学校にもいるようないじめっ子、いじめられっ子である。私たちの生徒・学生の中でも問題を抱えた者ほど彼らに共感を覚えるはずだ。授業を受ける生徒・学生が映画を通して少しでも精神的に成長し英語学習にも集中してくれることを期待した発表だった。最後の発表は、

吉村圭先生（鹿児島女子短大）の Japanese Comics and Animations as English Teaching Materialsで、世界中で人気を集め、



（八尋先生、吉村先生）

注目されている日本の漫画やアニメに焦点をあて、英語に翻訳されているものを英語学習に利用し、学生の動機付けにしようとする試みの解説だった。（高瀬文広）

【北海道支部】

医療英語教育における映画活用の手だて

(How to make use of movies in medical English classes)

北海道支部のシンポジウムのパネリストは、北間沙織先生（北海道医療大学）と秋山敏晴先生（北海道工業大学）と松田愛子先生（翻訳家）が務めた。松田先生は発表予定者であったが、白鳥亜矢子先生（北海道医療大学）の発表の代読をした。テーマは「医療英語教育における映画活用の手立て」で、次の3点に焦点が当てられた発表であった。

1. コミュニケーション能力育成の観点から
2. 比較医療文化の観点から
3. 医療と倫理の観点から

専門課程への橋渡しとして、上記3点を柱として授業を行っている。現在、「コミュニケーション能力」という課題について、英語学習に携わる者にとってあまりにも漠然



（秋山先生）

としてはいないだろうか。人が生活を営む「場」にはそれぞれの文化が存在している。こうした文化的側面はコ



（北間先生）

ミュニケーションが実践される場においては必要不可欠な要素である。今日の高等教育の外国語学習において、あまりにも合理化されすぎ、一般教養における外国語では扱う時間がない。パネリストの方々は例えば救急医療のシンボル“Stars of Life”、救急車

の Mirror Writing 利用を扱っていたが、日本にはない表記、語源の教授は、別の視点から学習者に英語学習の興味を喚起するであろう。大きな括りで言うと、「倫理的な側面」は文化的な一部になるが、時代の変化と共に、語彙の意味も大きく変化している。北海道大学での心臓移植は非常にセンセーショナルであったが、今日、臓器移植は当たり前になっている。

北海道支部のシンポジウムは非常に有意義なものであった。というのも、1~3が縦横に関連を持ち、不足した部分を補い、長所を活かす発想だったからだ。（諸江哲男）

■研究発表一覧

第19回全国大会の研究発表は下記のとおりである。タイトルの表記言語は発表での使用言語を指す。発表者の敬称は略する。

<Session 1>

研究発表 1

松井夏津紀 (チューラーロンコーン大学)

相づちとして機能する-*ly*副詞

研究発表 2

Kobayashi Toshihiko (Otaru University of Commerce)
Colloquialism in Junior & Senior High School English Textbooks Approved by Japan's Ministry of Education

研究発表 3

Im Mi-Jin (Kookmin University)

College Students' English Learning Style: Based on "Modern Family"

研究発表 4

佐藤みか子 (桜美林中学高等学校)

中学校・高等学校の英語 Reading における iPhone/iPad を使用した新指導法

研究発表 5

カレイラ松崎順子 (東京経済大学)

韓国の英語の教科書のデジタル教材から日本が学べること

<Session 2>

研究発表 6

角山照彦 (広島国際大学)

習熟度に対応した映画英語 WBT 教材の開発 —教材のモジュール化、そして共有化—

研究発表 7

Maass Miyoko (Seigakuin University)

Making the Most of the Movie Transcripts: Teaching English Using "Ghost"

研究発表 8

Seo Ji-Young (Kookmin University)

Practical Expressions Are Not That Practical

研究発表 9

中川英幸 (聖学院大学)

『ノッティングヒルの恋人』を使った focus on form アプローチの実践

研究発表 10

松本知子 (東海大学福岡短期大学)

英語の句動詞についての一考察 —効果的な指導法を求めて—

<Session 3>

研究発表 11

岡崎弘信 (秋田県立大学)、福田衣里 (創価大学)、新田晴彦 (専修大学)、木戸和彦 (環太平洋大学)

字幕再考: 視覚追尾システムを用いて

研究発表 12

Yokoyama Hitoshi (Kyoto Women's University)

Some Interesting Behaviors of Discourse Particles in Movies

研究発表 13

Jung In-Hee & Pyun Moo-Tae (Yongin Songdam College)

How to Improve Listening Skills through Movies in English

研究発表 14

日影尚之 (麗澤大学)、大月敦子 (相模女子大学)

映画『レ・ミゼラブル』の英語学習教材としての可能性

<Session 4>

研究発表 15

熊田岐子 (環太平洋大学)

文学テキストのイメージ形成を目的とした映画の活用

研究発表 16

鈴木幹樹 (熊本大学)、平野順也 (熊本大学)

完了形のレトリカルな機能の説明 —効果的な指導法を求めて—

研究発表 17

Seo Eun-Mi (Howon University)

Teachers in the Films: "Tuesdays with Morrie"

研究発表 18

鶴本正秀 (創価大学)

映画『Shall we ダンス?』の日英語ユーモア表現の比較

■決算報告

第19期 映画英語教育学会【決算報告書】

2012年4月1日～2013年3月31日

収入の部			支出の部		
前年度繰越		596,031	大会開催費	大会開催総費用	675,383
会員年会費	2010年度分@5,000 23	115,000	紀要発行費	紀要印刷費(抜刷り含む)	288,015
	2011年度分@5,000 29	145,000	ニュースレター発行費	ニュースレター印刷費	34,230
	2012年度分@5,000 314	1,570,000	ホームページ維持費	プロバイダー基本料金他	42,210
	2012年度分@4,000 1	4,000	研究活動費	支部活動助成	250,000
	2013年度分@5,000 16	80,000	事務用品費	備品・封筒作成・資料代他	31,600
賛助会費	2012年度分@10,000 7	70,000	通信費	電話代・郵送料・切手代他	173,437
	2012年度分@5,000 1	5,000	支部助成金	支部フェスティバル助成	150,000
	2013年度分@5,000 1	5,000	会議・遠隔地補助	理事会開催遠隔地旅費補助 他	417,550
大会参加費	会員@1,000 93	93,000	雑費	振込料他	7,455
	非会員@2,000 17	34,000	預かり金支払い	源泉所得税	4,410
大会懇親会費	@4,000 60	240,000			
書籍売上	紀要・ハンドブック・教育論	139,967			
受取利息		80			
書籍送料		670			
小計		3,097,748	小計		2,074,290
未払金		140,062		みずほ銀行	784,627
				郵便振替口座	223,476
				小口現金	49,450
				売掛金(Cinii)	105,967
				翌年度繰越金	1,163,520
合計		3,237,810	合計		3,237,810

※個人会員418名・賛助会員8社

2013年6月吉日 上記の通り相違ありません

会計監査 秋月 剛



ATEM Clapper Board

1) 第19回映画英語教育学会全国大会へご出展いただいた賛助会員の出版社は下記の通りです。この場をお借りしてお礼を申し上げます。今後ともご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。(50音順)

記

株式会社金星堂 株式会社くろしお出版
 株式会社松柏社 株式会社成美堂
 センゲージラーニング株式会社
 株式会社マクミランランゲージハウス

2) 英語教育のみならず、映画を使った英語学、文学、文化論、地域研究、コミュニケーション研究等の分野の先生方もご入会ください。また小中高の英語の先生方にもぜひご参加いただきたいと思っています。

3) ATEM 全国大会や紀要で研究業績をお作りください。韓国の姉妹学会である「STEM (映像英語教育学会)」の国際学会での発表のチャンスもあります。

事務局

～編集後記～

・第19回全国大会特集号である第25号の編集は、新広報委員会にとっての初仕事となりました。これを機に、少しレイアウトもリニューアルしました。

・本号の編集前の準備をしてくださった前広報委員長の塚田三千代先生、全国大会で撮影したたくさんの写真を提供してくださったICT専務理事の新田晴彦先生と旧広報委員の清水純子先生に、この場をお借りしてお礼申し上げます。

・次号は2014年4月に発行予定です。

 [広報委員会]

委員長：松田愛子

委員：秋好礼子、井土康仁、
 佐藤みか子、横山仁視

©ATEM All rights reserved.

